

若手アカデミーの動向

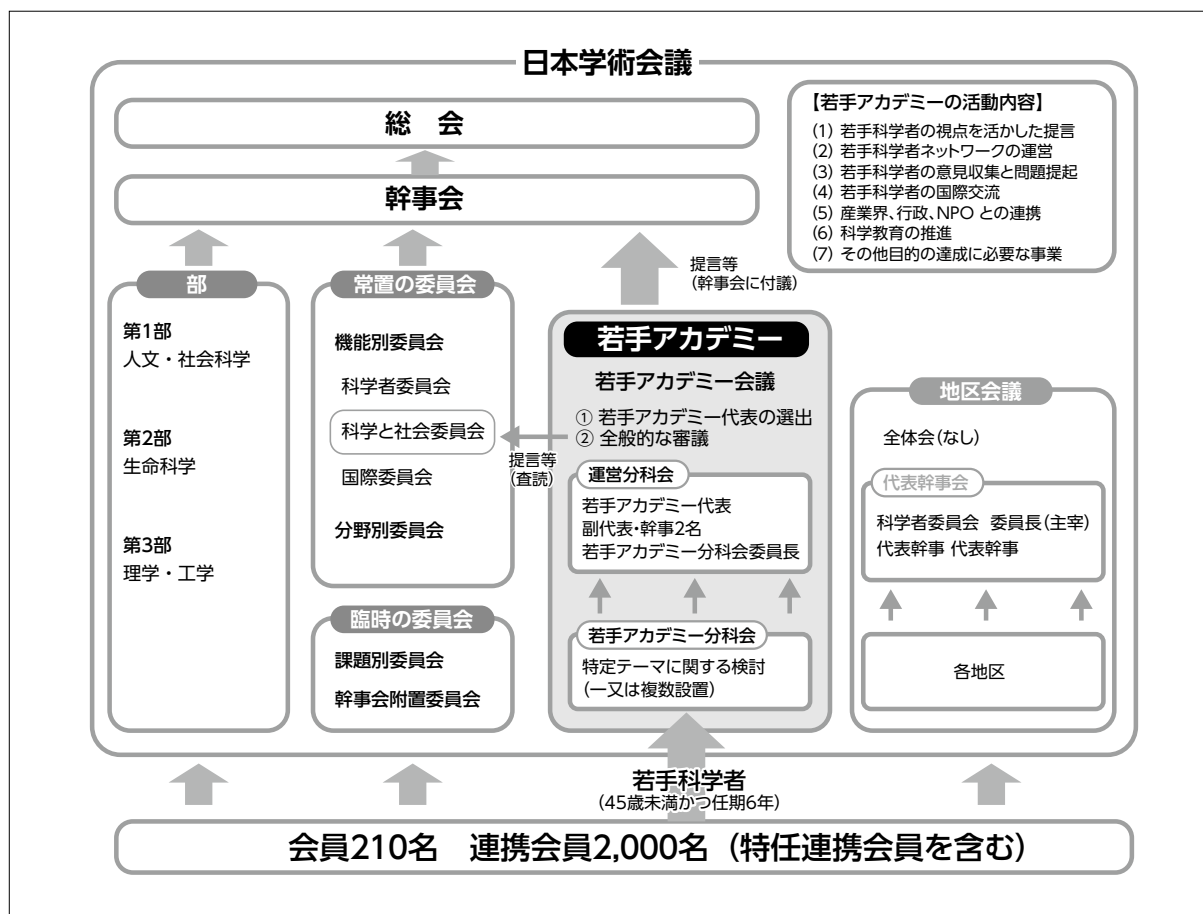
若手アカデミーの発足

住井英二郎



若手アカデミーは、日本学術会議の第23期（2014年10月～）に発足した、新たな常設の組織である。本稿では若手アカデミーの発足の経緯と現状を簡単にご紹介したい。

一般名詞としての若手アカデミー（Young Academy）は、2000年頃から欧州を中心に始まった、若手科学者（人文・社会科学の研究者を含む）によるアカデミー活動のための組織の総称である。日本学術会議をはじめ世界のアカデミーが参加する科学アカデミー・グローバルネットワーク（IAP）とも、世界経済フォーラム（サマダボス）等を通じた関わりが深い。国際的な若手アカデミー活動



日本学術会議における若手アカデミーの位置づけ

の経緯と現状については、2011年の*Science*誌編集長記事 (<http://dx.doi.org/10.1126/science.1206690>) や、2010年に発足した世界レベルの若手アカデミー組織であるGlobal Young AcademyのWWWサイト (<http://globalyoungacademy.net/>) が詳しいのでご参照されたい。

日本における若手アカデミー活動は、2009年から2010年にかけて幹事会附置委員会として立ち上げられた、日本学術会議本体の役員等と数名の若手特任連携会員からなる「若手アカデミー委員会」、および2010年に発足した、20名弱の若手特任連携会員（いずれも当時）からなる「若手アカデミー活動検討分科会」に始まる。その後、第22期（2011年～2014年9月）の若手を中心とする「若手アカデミー委員会」と会則の改正を経て、第23期（2014年10月～）に常設の「若手アカデミー」が発足、運営要綱によりメンバーは45歳未満・60名以内（2015年12月時点では30名）、任期は通算6年以内と定められた（図）。

前段の経緯や、その間の多岐にわたる活動の詳細に関しては、紙面の都合もあり若手アカデミー委員会（当時）のWWWサイト (<http://www.youngacademy-japan.org/>) 等をご覧いただきたいが、その一部を以下に列挙する（前期の若手アカデミー委員会のもとで設置された「学術の未来検討分科会」ならびに「若手研究者ネットワーク検討分科会」による活動を含む）。

- ・公開シンポジウム「若手アカデミーとは何か」（2010年）、「若手研究者の考える、震災後の未来—学術に何ができるのか—」（2011年）、「『心の時代』と学術—若手研究者とともに考える社会の不安と喜び—」（2012年）、「学術と未来想像 人は未来の社会を展望できるのか」（2012年）、「若手研究者ネットワーク活用に向けて—若手研究者をめぐる諸問題へのとりくみと学際融合による研究の創出」（2014年）、「社会に対する若手研究者の責任—科学者倫理と若手研究者—」（2014年）開催
- ・サイエンスアゴラ（2010年、2013年）、科学・技術フェスタin京都（2011年、2013年）企画出展
- ・総合科学技術会議（当時）大臣・有識者会合をはじめとする各種会合等への参加
- ・Global Young Academyをはじめとする国際的若手アカデミー活動への参加、若手科学者アジア会議（2014年）開催
- ・国内若手研究者ネットワークの設立、同代表者会議・シンポジウム・ポスターセッション等開催、改正労働契約法に関する意見収集および関係各所との意見交換

今期に入り常設の「若手アカデミー」が設置されてからは、運営要綱やメンバーの確定にやや時間を要したが、2015年2月に第1回若手アカデミー会議（全メンバーによる会合）を開催、上田泰己代表（東

京大学大学院医学系研究科)・狩野光伸副代表(岡山大学大学院医歯薬学総合研究科)・隠岐さや香幹事(広島大学大学院総合科学研究科)・住井英二郎幹事(東北大学大学院情報科学研究科)がそれぞれ選出された。7月には2日間にわたり第2回若手アカデミー会議を開催、その後、「若手による学術の未来検討分科会」「若手科学者ネットワーク分科会」「イノベーションに向けた社会連携分科会」「国際分科会」の4分科会が設置され、科学技術政策に関する行政との意見交換を行うなど本格的活動を始動しつつある。各分科会の詳細等は日本学術会議のサイト内にある現在の若手アカデミーのページ(<http://www.scj.go.jp/ja/scj/wakate/>)を参照いただきたい。

若手アカデミー運営要綱は以下の七つの活動を掲げている。(1)若手科学者の視点を活かした提言、(2)若手科学者ネットワークの運営、(3)若手科学者の意見収集と問題提起、(4)若手科学者の国際交流、(5)産業界、行政、NPO等との連携、(6)科学教育の推進、(7)その他若手アカデミーの目的の達成に必要な事業。今後とも、日本学術会議をはじめ科学者コミュニティ内外からのご支援をお願い申し上げつつ、学術と社会の健全な発展のため、若手科学者の組織として意義のある貢献を行なっていきたい。

●プロフィール

住井英二郎(すみい えいじろう)

日本学術会議連携会員・若手アカデミー幹事、東北大学大学院情報科学研究科教授

専門:情報学基礎理論、ソフトウェア

STS フォーラム参加報告

荒木稚子



昨年10月初旬、京都国際会館にて開催された「科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム(STSフォーラム)」第12回年次総会に、若手アカデミー(国際分科会)からの代表として参加した。

STSフォーラムは、科学技術と社会に関する問題を人類が抱える共通課題として議論するため、2004年より毎年秋に京都で開催されている。今回の総会には、世界中から1,000名を超える産学官各界のリーダーが集結し、「エネルギーと環境」「ライフサイエンス」「工学とイノベーション」「自然保護」「科学技術における協力」「科学技術と教育」「情報通信技術・スマートシティ」について、プレナリー

およびコンカーレントセッションにおいて、3日間に渡り議論が行われた。(詳細は、<http://www.stsforum.org/>にてご覧いただきたい。) また今回の総会では、本フォーラムの持続的发展を目的として「未来のリーダー・プログラム (Future Leader 2015)」が創設され、世界中から約80名の若手リーダーが参集した。(私は本プログラムを通じての参加となった。) 本フォーラムの前日に開催され



Dialogue 参加者集合写真 (最前列には参加して下さったノーベル賞受賞者、筆者は最後列右から四番目)

たDialogue between Future Leaders and Nobel Laureatesにおいては、7名のノーベル賞受賞者とともに、100年後の科学技術・政策などについて活発な議論が交わされた。

STSフォーラムでは、各界を牽引するリーダーたちの講演や、リーダー同士の白熱したディスカッションを拝聴し、大きな刺激を受けた。一方で、セッション間やランチ・ディナーの席においては、気さくでwittyなリーダーたちの側面に触れることができた。Dialogueでは、各分野で活躍する気鋭の若手科学者たちと意見交換を行ったり、ノーベル賞受賞者の先生方の意見を直接伺ったりと、大変貴重な経験となった。本フォーラム・Dialogueへの参加を通じて、世界における日本のリーダーのあり方や、持続的社會のための科学技術について、改めて考えさせられ、大変有意義な数日間となった。

終わりに、このような貴重な機会を与えて下さった関係者の皆様に感謝申し上げるとともに、今回の経験を日本学術会議および若手アカデミーでの今後の活動に生かしていきたい。

●プロフィール

荒木稚子 (あらき わかこ)

日本学術会議連携会員、埼玉大学大学院理工学研究科准教授

専門：材料力学、破壊力学